

5) 抗真菌薬の使い方

¹ 埼玉医科大学 感染症科・感染制御科

○前崎 繁文¹

真菌症の治療には抗真菌薬が投与される。近年、有効性と安全性に優れた抗真菌薬が開発され、真菌症の治療は飛躍的に進歩した。臨床使用できる薬剤が増えた半面、それぞれの薬剤をどのように使っていくかを悩むことになる。真菌症は原因真菌により有効な抗真菌薬が異なってくる。そのため、原因真菌を正確に同定し、酵母状真菌では薬剤感受性試験を実施し、薬剤を選択することが理想的であるが、実際の症例では原因真菌を同定できないことも多い。また、現時点では臨床的にそれほど問題となっていないが、耐性真菌にも注意が必要である。さらに、耐性菌ではないが、本来その抗真菌薬の抗真菌活性が弱い低感受性菌が原因真菌となったり、治療の経過で Breakthrough Infection として現れたりすることにも注意が必要となる。また、実際に薬剤を投与する際には、抗菌薬のようにはいまだ十分に解明されていないが、PK/PD に基づく投与設計や、副作用、併用薬などにも注意が必要となる。このように抗真菌薬の使い方に対して内外から様々なガイドラインが発刊されている。それぞれのガイドラインはより信頼性の高い RCT (Randomized Controlled Trial) の結果から導かれ、より有効な治療薬の選択を示しているが、真菌症そのものが比較的まれな感染症であり、統計学的解析に耐えうる十分な症例数で RCT を行うことは容易ではない。また、ガイドラインにそれぞれの国の抗真菌薬の適応症や医療経済性なども考慮され、必ずしも内外のガイドラインが推奨する抗真菌薬が同じではない。このシンポジウムでは、このような背景からそれぞれの真菌症における抗真菌薬の使い方について考えることとする。